

# 川と人

Vol.16  
2000

[2000年記念号]

ミレニアム夢企画 石狩川への夢を語ろう



小さな体に宿るユニークな習性

## エゾトミヨ

トグウオ目トグウオ科

体長60～82mmの小さな小さな魚だが、現在の石狩川の生態系を考えるうえで、重要と位置づけられている魚でもある。なぜなら日本版レッドデータブックで希少種に指定され、数が激減しているためである。北海道の各研究機関では、種の保存のために研究がなされている。

小さいながらもひじょうに気が強く、魚には珍しく雄が巣を作り、子育てもする点が有名。生涯淡水で生活し、石狩川に局所的に分布する。



### 石狩川に想う

高橋揆一郎(作家)

札幌市の南に広がる中島公園を、豊平川から分水されたように流れる小さな川がある。

大河・石狩川からみれば掘割にも満たないものだが、何年前か、私はこの川で、子供っぽいと笑われそうな遊びをしたことが忘れられない。ここにかかる橋の欄干に身を寄せ、まず上流に向かって下の流れを見つめていると、橋が動き出して、私は上流に向けて橋ごと前進する。試しに下流側に移って下を見下していると、今度は橋が後退してゆく。

もろもろ錯覚に過ぎないのだが、流水のいたずらは実に神秘的に感じられた。

同じころ、私は石狩川河口でテレビ取材を受け、河口の余りの広大さに舌を巻いたものだが、連想は少年時代に遊んだ空知川の流れに行き着く。同時にいつの日か石狩川橋から下を見つめて前進後退をぜひ味わってみたいと思っている。そして小さな夢を育てている。

兵防風の養殖と「石狩川讃歌」のオーケストラ曲と合唱曲の誕生である。



「ミレニアム夢企画」

# 石狩川への夢を語ろう

いよいよ1000年に一度の記念すべき年が明けました  
この出来事にふさわしく、各分野でご活躍されている「石狩川を愛する人々」から、  
次の時代の石狩川へ、メッセージをいただきました。



## 2~10 [ミレニアム夢企画] 石狩川への夢を語ろう

### 11.12 インタビュー



### 川に生きる

有限会社ビーバーカヌー  
代表取締役

小林 茂雄さん

### 13.14 流域の現在

秩父別町「ローズガーデンちっぷべつ」  
芦別市「キャンドルアート」

### RIVERS Topics

15.16 ■北海道開発局・北海道  
千歳川流域治水対策全体計画検討委員会

17.18 ■北海道開発局石狩川開発建設部  
滝里ダムの周辺環境整備

19 ■北海道開発局旭川開発建設部  
福祉の川づくり

### 20 2000年石狩川 イベントガイド



The Message from

### 21.22 石狩川振興財団 活動報告

- 第5回石狩川サミット
- 編集後記





## 夢を…石狩川から

原田 雅彦 (スキージャンプ選手)

大雪山麓・上川町の緑深い山々から流れ出る、キラキラ輝く川辺が私の故郷の川です。その時は気づきませんでした。今になって思えば、とてもいい環境で育ったのだとしみじみ感じています。もう少し時間が持てるようになったら、家族とカヌーに乗ったり、川遊びをしてみたいと思っています。

私は雪の多いまちで、遊びの中でスキーの楽しさを知りました。石狩川もその自然環境を生かして、子供達が遊びながら自然を知って、夢を育む場になってほしいですね。遊びの延長がスポーツだったり、勉強だったりする。そこで遊んだ子供の中に、将来のオリンピック選手が出てきたり…。豊かな自然に触れて育った子供は、きっと夢もデカイと思いますよ。

私個人の夢としては、現役最年長のワールドカップ出場という記録を続けていきたいですし、もちろん次のオリンピックでもメダルは狙います。夢の持つ力って、大きいのですから。

## あの川をもう一度

大谷 裕香 (旭川市立東鷹栖中学校3年)

「昔は、川で魚つりをしたり、よく川で遊んでいたよ。」という話を聞いたことがあります。しかし、最近では、そんな様子を見かけることはほとんどなく、反対に「川は汚れている。」そんな言葉を耳にするようになりました。私の住んでいるすぐ近くを流れている石狩川も、やはり、水は茶色くにごり、その水面に、ビニール袋などのゴミが浮いているところを私も見たことがあります。これは川に住んでいる魚、植物に、悪影響を及ぼしているのではないのでしょうか。

しかし、なぜ川は汚れてしまったのか、私は不思議に思いました。大半は人間の責任だと思いました。川もしくは自然にゴミを捨てるのはもちろん、家庭では多量の洗剤を使い油の始末が悪いことなどが川を汚す原因として上げられます。が、このようなことは、川だけではなく美しい自然環境を取り戻そうという意識だけで、改善することができるのではないのでしょうか。私の学校では、地域のゴミを拾う活動の企画が持ち上がりました。このような運動は環境を保護し、美しい自然を取り戻し、昔のようにたくさんの生き物がきもちよく生活できる川も取り戻すことができるのではないのでしょうか。

私自身、この作文を書くことにより、私生活を見直すことができ、自然環境に対する知識、そして、私にもできる自然を守るための活動を考えることができました。

たくさんの魚が泳ぐ石狩川へつりにしに行く日を楽しみにして、私の学校でも、色々な企画を出し合い、地域などの活動にも積極的に参加し、環境を、そして石狩川を守っていきたいです。

(「石狩川に魚と虫を捕ろうかい」石狩川～メッセージ集～から 上川支庁長賞)

## 大きな魚が悠々と泳ぐ石狩川

岡本 康寿 (札幌市豊平川さけ科学館)

石狩川は、人間の手によってその姿を大きく変えられてきました。最近石狩川と付き合い始めた私にとっては、本来の石狩川の姿を想像することさえ困難です。治水のためには仕方のないことですが、昔の面影を今もわずかに残す場所は、そこに棲む生物のために、また我々の子供達のために、これ以上手を加えずに残していかなければ、と考えています。

また、昔は海と川、上流と下流を行き来する、シロザケ・イトウ・チョウザメといった大型魚がたくさんいました。しかし現在、これらの魚は限られた場所で見られませんが、大きな魚がいるということは、それだけで川の魅力を何倍にもしてくれます。そこで、流域の人々が、これらの魚を復活させることを目指す、というのはどうでしょう。ダムなど移動の妨げになる物を見直し、適した棲みかや産卵場所を提供し、樹を植え、川の水を汚さないようにすれば、いつか魚は戻り、石狩川は失った魅力を取り戻せるかもしれません。



石狩川への夢を語ろう

「雄大な自然河川として、人を遊ばせ、楽しませる偉大な親水空間に再生」

## ホタルが住める里に

武田 しのぶ (上川町立東雲小学校6年)

私は小学2年生からホタルを飼いはじめました。理由は昔、東雲にはホタルがたくさんいるという話を父さん方から聞いたからです。そこで、東雲の環境をよくし、ふたたびホタルが飛べるようにしようと、ホタルの飼育をはじめました。タニシなどのえさを田んぼからとってきたりくろうしました。そうして、学校の近くの湿地に「ホタルの園」を作り毎年ホタルの幼虫を放流しています。しかし、それだけではホタルが住む東雲にはなりません。水をきれいにしなければホタルは住みません。とくに生活廃水はくさくさしてきて、水の中の生物や、まわりの草花にもえいきょうがある事に気づきました。廃水には油が入っています。そこで、その油を再利用して廃油せっけんを作る事を考えました。廃油せっけんを作り終わったら、実験をしてみました。廃油せっけんを水でとかしソバの芽がでるのか、調べてみました。実験結果は、なんと芽がでました。この事を、地域のみなさんに知らせ、廃油せっけんをくばりました。これで生活廃水は少しは、きれいになると思いました。

東雲には、国道39号線が通っているのので車の窓から、カン、お店で買ったお弁当などのゴミをなげる人がたくさんいます。そこで、老人クラブの方々と力をあわせて、

ゴミひろいをする事になりました。ゴミひろいでは、使用済みの紙おむつ、

かん、つり橋の近くでは、つり人のゴミなどがたくさんありました。

なぜこんなにゴミをすてるのだろうかと思いました。

私たちは、ホタルが住める東雲にしたいので、生活廃水をきれいにしようと努力したり、道路や川、まわりのゴミひろいを続けています。

石狩川のまわりに住むみなさんも、ホタルの住める地域をめざしてがんばってください。

(「石狩川に魚と虫を捕ろうかい」石狩川～メッセージ集～から 旭川開発建設部長賞)



## エコワールド・石狩川

原子 修 (詩人・札幌大学教授)

新しい千年間を、人類が滅亡せずに存続するためには、人と自然の共存関係は、現在とは大きく変化するはずだから、北海道と石狩川の関わりも、今では想像もできない様な姿に変貌しているに違いない。

人間の新しい親自然的な住環境の創出は、洪水などの河川運動をむしろ受容する方向で芸術化、機能化され、著しく原始河川へと回帰した石狩川と、それを取り巻く森林空間が、高度に人間化されたコミュニティと、完全に技術的に共生しうる、エコワールドが出現しているであろう。

人工化されたウォーターフロントを自然状態へと再生する河川工学が開発され、石狩川は、雄大な自然河川として、人々を受け入れ、遊ばせ、楽しませ、大自然の摂理を学ばせる偉大な親水空間として再生しているであろう。



## 川への思い

石井 邦紀 (雨竜町立雨竜中学校 教頭)



私が生まれたのは山形県の鮭川村で、最上川の大きな支流「鮭川」の流れる豊かな農村です。私の母達は子供の頃、鮭川の水量豊かな清流で水遊びをしながら育ったと聞いています。私は幼稚園に入る頃から、砂川市の南端、奈江川のほとりに移り住みました。そこでの夏の遊びは、釣りや川蟹とりなど、川と河川敷の中だったと記憶しています。水害が毎年のように襲い、恐ろしい思いもしたはずですが、今は楽しかった思い出が大きく膨らんでいます。

今私の子供達は、ちょうど私や母が川辺で遊んでいた年頃となっています。しかし、残念なことにこの子供達が大人になった時、楽しい「川の思い出」はどこにも見つからないことでしょうか。豊かな水辺は人類の歴史とともにあり、人々の最も重要な生活の場であったはずだったのですが、

昭和の半ばから大幅に進んだ河川改修により、子供達が安心して遊べる「川」が絶滅してしまいました。私達教師は、春先になると「川に近づいてはいけない」、夏になると「川で泳いではいけない」などと児童生徒に指導し、水辺の遊びから遠ざけています。このことは、子供達から思い出を奪うだけでなく、人間として本来身につけなければならない、逞しい生活力さえ奪ってしまうこととなります。それを身につけさせるために「冒険学校」に子供を入学させるなどという、滑稽なことが必要になるのです。

私達が今、子供達のためにしなければならない、最も大切なことの中の一つは「安心して心のままに冒険し、遊ぶことができる川や水辺、心とむせせらぎの音、光に輝く水面等々を残してあげること」、と私は考えています。子供達が心身ともに健康な人間となるために欠かすことのできない、生きている川。化学物質や汚物で汚染されていない、様々な生き物が健康に生きることができる、自然の瀬や淵のある、私達が子供の頃の川。それを、ぜひ再現しなければと願っています。



## 石狩川について

岩木 慎吾 (新十津川町立新十津川小学校 5年)

ぼくは、新十津川町に住んでおり、その新十津川町と滝川市の間に石狩川があります。石狩川を見るたびにぼくは、「きたない」と思います。昔の川は、魚とりや水遊びなどで子供達の遊び場にもなっていたと聞きました。

なぜこんなに川がきたなくなつたのか。それは人間がゴミをすてたりきたない水を川に流したりする人がいるからだ、とぼくは思います。だから、魚もあまりいなくなつてしまったのでしょう。

川でゴミを出したら自分でもって帰ることを心がけた方がいいとぼくは、思います。

新十津川町では「ラブリバー」と言う団体で毎年、川のいっせいそうじをやっています。今年(昨年)は5月に行い、トラック数台分のゴミが出ました。中には、自動車もすてられていたそうです。みんなが、ルールを守ってきれいにしようと協力することによって昔のような魚やホタルが住みやすいかんきょうになるのではないのでしょうか。

また川の水は大切な資源です。ぼくたちの飲み水や農業に使う水なので大切にしてほしいと思います。

(「石狩川に魚と虫を帰そうかい」石狩川～メッセージ集～から 石狩川振興財団理事長賞)

## 石狩川でのキャンプ

進藤 紀子 (恵庭市恵み野西「生き生き老後を支える会」)

生まれも育ちも空知の一巳村(現深川市)。中学の時の楽しい思い出は、夏休みのキャンプです。クラスの仲間と先生で、リヤカーに荷物を積んで石狩川へ。浅瀬を渡って川の中州です。

大きな石や小さい石を組み合わせ、かまどを作り炊事。夕食の準備が整ったら、泳ぎに自信と勇気のある男の子が、石狩川を泳いで対岸の音江村へ。川幅が100m以上もあり、急流で200mくらい流されます。それを計算に入れて、帰りは上流まで歩き、また泳いで戻ってくる…。男の子達はスリルを味わい、石狩川の怖さを知って育ちました。

石狩川にも、層雲峡の清流や、神居古潭で淵になっている場面もありますが、そこにもし広い河原があったら、障害児、障害者が河原で、ゴロゴロある石の感触を味わい、川の流れや水辺の草を見たり触ったりしながら、健常者とともにキャンプができれば、どんなに楽しく、癒しにもなるだろうと思います。



## いつまでもつりができる川に

大久保 勇志 (滝川市立第三小学校 4年)

去年の夏休み、近くに川があって、自然がいっぱいのキャンプ場に行きました。ぼくは、何日も前から楽しみに、つりの道具をだしたりして用意をしていました。海づりはしたことがあったけれど、川づりは初めてだったので、どんな魚がつかれるかわくわくしていました。

キャンプ場にきてみると、たくさんの方がきていてとてもにぎわっていました。どの人も、とても楽しそうでした。でも、きれいな自然の中にちょっとがっかりするものがありました。ゴミ箱がちゃんと用意されているのに木のかけや草むらに空きかんやトレイがすてられているのです。また、川の方に行ってみると、そこにも空きかんやトレイで作った船のおもちゃのようなものがいっぱいありました。もちろん魚は全然つかれませんでした。

つれたと思ってひき上げてみるとゴミがひっかかっているだけでした。ぼくが、あきらめてもどろろとすると、4、5人のおじいちゃん、おばあちゃんが、はだしてうでまくりをして、手にはゴミぶくろを持って、空きかんなどを拾っているのが見えました。キャンプ場にくる人たちはきれいな山や川を見たくてくるのに、その人たちがよごして、よごさないおじいちゃん、おばあちゃんたちがかたづけしているなんてへんだとぼくは、思いました。だんだんはらが、たってきました。そして、ぼくは、初めて知りました。



きれいな山や川も、こういう人たちのどりょくのおかげなんだということ。川に魚や虫などいろいろな生きものたちがすむということは、昔は、あたり前のことだったけれど、今はきれいにしようとする人がいないと守れなくなってしまったのだとわかりました。ぼくは、つりが好きだから、生きものすめる川を守れる人でいたいと思って、キャンプの後、ゴミを持ってかえりました。

(「石狩川に魚と虫を帰そうかい」石狩川～メッセージ集～から 空知支庁長賞)

## 「流れる遊歩道」による、日本海への小旅行

池田 亨 ((社)滝川スカイスポーツ振興協会 事務局長)

“母なる大河”石狩川は、まさに北海道開拓の大動脈としての位置づけを担っていたわけですが、鉄道・道路の発達に伴い、その役割も開拓当初とは大きく変わってきました。

今、21世紀を見つめる時、これまでの歪みを是正し、「人と自然が真に共生できる石狩川」であらねばならない、と考えています。では、石狩川において人と自然が共生するということは、どういうことなのでしょう。私は、次のような想いを常々募らせています。

「川の恵みを生かす」「環境に優しい開発」。

具体的に川の恵みを生かすためには、石狩川を「流れる遊歩道」として位置づけ、その道沿いの広大な河川空間を利用して、地域の特性を生かしたユニークな遊びの場を創出する(ワールドワイドなソフトの案出)。イメージとして、神居古潭の激流を使用する「カヌーのワイルドウォーター」、滝川での「グライダーによる空中散歩」、河川敷でのキャンプやその土地々々の文化伝統行事を楽しみながら、日本海までの小旅行を満喫する。

そのためにも、野鳥や魚が生息しやすい水の澄んだ、水量の豊富なコンクリートの見えない河川環境を整備しなければならないと考えます。





## 流域が個性豊かに輝く「天の川の映る川」

大久保 真弓 (フリーアナウンサー)

バンクーバーにいた頃、友人の一人がハウスポートに住んでいた。遊びに行くとベランダで足を川の水につけながら漁から帰る舟や向岸の家々の明かりを眺めたものだ。ある時、空を飛ぶ鳥が川面に映るのに気づいた。川の中の魚と重なって見える事もある。流れる雲や、リラックスした私の顔も映っていた。

そんな事を思い出して、ふと思った。

未来の石狩川は「天の川の映る川」であってほしいと。そして、天の川を川の中からも見る事ができたらどんなに素敵かと。そのためには、水質管理や空気の清浄化、景観への配慮が必要だろう。民話等の復活や創作もロマンをかきたてる。でも本当は星だけでなく、流域48市町村に住む人達が個性豊かな「天の川」となって映ってほしいと思う。舟運等で石狩川を川の中から一連で体験する事ができたら、個性はますます磨きがかかるだろう。そうしたら石狩川そのものが「生きた博物館」のようになり、より魅力的になると思う。

## 10年後の石狩川

宮川 恵美 (江別市立北光小学校6年)

私たちの学校のちかくにある石狩川は、いつ見ても、きたない川だ。そんな石狩川を見て、10年後は、どうなるのかと思った。

石狩川のきたない原因は、工場や、家とかのきたない水や、せんざいのせいだと思う。まだまだ原因はあるかもしれないが、私はそう思う。今から石狩川をきれいにしようどりよくをすれば10年後は見がえるほどきれいな川になると思う。それか、「どうでもいいや」と思う人がいればいほど、10年後は今の川よりもっとひどい川になると思う。私の理想の石狩川は、ちかくに公園があり、きれいで、のめるほどきれいな石狩川であそべるような所になってほしい事。こう思うのは、私だけじゃないと思う。みんなで、努力し、きれいで、楽しいあそび場のある石狩川が、10年後に現実できたらゆめのような。そういえばなぜ、昔はきれいだった石狩川が、今のようになったのか不思議だ。きっと、だんだん「どうでもいい」というかんがえの人が、ふえてきたからだと思う。みんなで努力して、昔のような石狩川になればいいと思う。

(「石狩川に魚と蜚を帰そうかい」石狩川～メッセージ集～から 石狩支庁長賞)

## 石狩川にロマンを!

山形 積治 (北海道教育大学旭川校教授・物理学)

肥沃な土地を求めて古代の人々は大河の流域に集落を作り、そこに文明が発達した。河は氾濫し、そのために犠牲も出たが、氾濫をコントロールするための土木工事が必要であり、数学や物理学の発展を促した。

洪水の時期を予測するための天体観測が天文学になり、さらに困難を極めた水のコントロールと天体の運動が結び付き多くのギリシャ神話が創られた。さらに天体の運行と人の運命とを結び付け、占星術となっていく…

このように大河は人々のロマンを沸き立たせる存在である。しかし、行き過ぎた河川管理がもたらす自然破壊と、ひたすら盛り上げる人工堤防によって、人と河とが切り離された。

現代の心の荒廃を見たとき、もう一度、子供の頃泳いだ石狩川、「どんこ」釣りをした石狩川、川辺で春の日に打たれて恋を語った石狩川、やぶれた夢を慰めてくれた石狩川に戻ることが必要な時代になってきた。

河を公共事業のみの対象、利権の餌食にすることなく、石狩川を道民みんなのシンボルにしたい。



(一番左が山形さん)



「石狩川への夢を語ろう」  
「ゆったりと流れる川を、2mを超す巨大な魚がゆっくりと遡上する姿」

## Come Back! 「チョウザメ」

前林 衛 (北海道電力(株)総合研究所)

私達の研究所では、かつて北海道の河川に生息していたと云われるチョウザメの研究を行っています。チョウザメについては、1800年代後半、北海道を探検した松浦武四郎の日記にも名前が記され、古くは1700年頃の江戸時代、道内で漁獲されたチョウザメが、刀の柄や鞘の材料として使われていたとも伝えられています。もちろん、北海道では食料としても利用されていたようです。今はその姿も見られなくなりましたが、道内の漁業協同組合や研究機関の協力で構成されているチョウザメネットワークの漁獲情報によると、現在でも北海道沿岸に、数種類のチョウザメが来遊していることが分かりました。それらのチョウザメの中には、河口近くで捕獲されたものもあります。ひょっとすると、産卵のために来遊したのかとも思いますが、残念ながら河川を遡上して産卵が行われている様子はありません。

どのような原因で北海道の河川から姿を消したのか、今となっては知る術もありませんが、もし叶うことならば、満々とした水を湛え、ゆったりと流れる石狩川を2mを超す巨大な魚が、ゆっくりと遡上していく姿をみたいものだと思います。

チョウザメが再び石狩川に戻るには、川の水質改善や産卵するための環境整備などを始めとする多くの問題があり、解決するまでに長い年月を要することでしょう。その夢の実現のためには、多くの方々の協力が必要であることが第一ですが、私達もその可能性を信じて、研究を続けていきたいと思っています。

私達の研究所は、江別の石狩川下流域に接していますが、滔々と流れる石狩川にかつて遡上・降海していたチョウザメの姿を想像しながら川面をじっと見ていると、チョウザメが川底に身を潜めているような、そんな気がしてきます。皆さんも一度お試しあれ。



## 自然を大切に

向 奈都紀 (石狩市立石狩小学校6年)

私は自然について、今まであまり深く考えたことがありませんでした。たまたま、国語の教科書に自然のことが書いている文章があったけど、その文章を読んだり、聞いたりしていても、自然についてなにも考えていませんでした。でも、この作文を書く事になって、今まで何も考えていなかった自然がとても大切な物だということがわかりました。どうしてかという、自然の中では、動物たちがすんでいます。動物たちは、自然がないと生きてゆけません。なのに、このころ、動物たちにとってとても大切な自然が、なくなってきているのです。それは、人間が自分かかって、自然の木などを切りたおしたり、燃やしたりしているからです。こうした、人間の自分かかって自然はかいてによって、すむ所をなくした動物たちがたくさんいます。森林の中にいる動物たちだけではなく、海や川にいる動物たちも、人間が出す汚水で、水がきたなくなり、とつてもすみずらくなっていると思います。

私のすんでいる町には、「石狩川」という大きな川があります。その石狩川も最近、きたなくなってきました。昔の石狩川は、人が泳げるくらいきれいだったのに、今は、きたなくて泳ぐどころじゃありません。だから、また石狩川をもとの、人が泳げるくらいきれいな川にもどりたいです。川をきれいにするためには、ゴミをポイ捨てしない、水をムダにつかわない、洗剤などをたくさんつかわない、きたない水をださないようにする。など、私なりに考えてみました。一人だけではなく、みんなが注意すれば、また川はきれいにもどるのをわすれないうでください。川がきれいになれば、木を切りすぎたり燃やすぎなければ、悲しい動物も減ると思います。だからみなさん、悲しい動物を減らすため、石狩川だけではなく、いろんな川をもとのきれいな川にもどすために、自然を大切にしてください。

(「石狩川に魚と蜚を帰そうかい」石狩川～メッセージ集～から 石狩川開発建設部長賞)



## 水にやさしい、ディンギーのメッカに

伊藤 雄幸 (江別ヨットクラブ副会長)

江別の石狩川で13年間、6月から8月の週末はディンギーヨットに乗っています。ただ川を横切るのではなく、ヨットは風軸45度以外、風に乗って上ったり下ったり、川を縦に使うことができるので、ヨットに適したフィールドだと思います。しかも動力を使わないから水を汚さない。ヨットというものは自然に対する自分の力だけで動かすものだから、風を読む力と知識や経験で思うままに動ける。静かな所に行って、ちょうどいい風が吹くと、「ピチッ、ピチッ」と、ヨットの水を切る音が聞こえる。空は真っ青で、いつもと違う視線から見る風景、魚がポンッと入ってきたり…。自然の中にいる素晴らしさ。私はここでこのスポーツを広めたいと思っています。ディンギーヨットは車で簡単に運べます。マリンスポーツができる川は珍しいので、将来、あちこちで帆を張る姿が見られるような、豊かな川であってほしい。



風が吹路さん

## 水質を守る生活を源流の文化に

渡部 ヒデ子 (上川町商工会婦人部 部長)

春の光に照らされて、キラキラとダイヤモンドのような輝きを放って、流れている石狩川。その川面を見つめると、ずっとずっと遠い昔の頃が、川の流れるように次から次に蘇ってきます。河原で同級生とカレーを作って食べ、男の子も女の子もパンツ一丁で泳いだり、水をかけ合って川の中を走り回った事。土用の丑の日、家族で行ったドンコ釣りの楽しかった事。大雪山麓・石狩川源流のまち、上川町に住む私達は、素晴らしい自然環境の中で、おいしいお水を飲んでます。この幸せに感謝し、これからも石狩川の水質を守り続ける生活を創造・実践し、このまちの文化として、次世代に伝えていく。そして、この素晴らしい自然環境の、そのすべてが体験できるよう環境を整備して、昔のようにサケがそ上し、水辺にホテルが舞い、子供達の歓声が響き合う、そんな地域に変わり輝くことを願っています。



後列左から2番目が渡部さん

「私達は商工会婦人部として、合成洗剤追放運動に取り組むべきかどうか、真剣に話し合った一昨年4月の総会から今日まで、たくさんの事を学びました。環境問題は商業者の利益には直接つながらないかもしれませんが、地域が輝き続けることこそが、個々のお店の発展につながるのだと信じ、未来をしっかりと見極めて、石狩川源流のまちから水の大切さを発信していきたいと思います」。



## ターザン広場と水中散歩

佐伯 昇 (北海道大学工学部 教授)

母なる石狩川は多様な可能性を秘めている。子供の遊び場として「ターザン広場」、あるいは「水中散歩」を楽しめる移動可能な空間、これらは自然のままを残した野鳥達の楽園の中にある。具体的には、ターザンは自然の申し子、たくましい子供達が育つために、遊び場を作る。浅瀬と淵があり泳げる空間、ツタのロープによる水中ジャンプ、岩からの飛び込み、流木やウキによる川下り、ヤス、タモ、ツリによる魚捕り。もちろん自由にシャケも捕れ、焚き火でイモを焼き、魚を焼く。まったく自由な広場である。ボランティア用あるいは観察用のハウスなどがある。

さて「水中散歩」は透明な水中トンネル、潜水艇、あるいは舟底、舟壁が透明な遊覧・悠々艇、水中にライトを付け、川を低速で動き、冬も可能な「水中散歩」。水中カメラ、マニピュレーターによる触れ合い、流れに乗って悠々自適の水中散歩である。

堤防が自転車道としてアクセスし、ピオトープの森の中にこれらの施設が点在する。



## 川といとном

星澤 幸子 (料理研究家)

昔から川は人の営みの傍らにあり、様々な役割を果たして来ました。というより、川の傍らで人々は生活を始めた、という方が正しいかもしれません。今のように科学技術が発達する前は、川がなくては生活が成り立ちませんでした。時代が変わろうと科学が発達しようと、水を運ぶ川の存在は生活圏の中心的存在であり、傍らに流れているということは、心の安らぎにもつながります。北海道ではどこにでも川の流れてあり、当たり前のように感じて生きていましたが、それがこの地の豊かさを表し、心の平安をもたらしていることに気がつくべきだと思います。どうしようもなくなってから、その大切さに気がついても簡単に取り戻すことができず。洪水を防ぐためにという事で、川の流れを変えようとの動きがありましたが、協議の末撤回されました。英断であったと胸をなでおろしています。動物保護も大事ですが、なぜそこに流れているかは、長い歴史の中で意味があってそうなったのであって、可能だからといって簡単に地形を変えるべきではないと考えます。

幼い頃、家の傍らの小さな川が遊び場で、毎日ドジョウを追いかけしていました。雪解け頃になると、雪でふさがっていた川の上に穴が空き、水の流れが見えます。もしゆるんだ川の上の雪に乗ったら、川に落ち、蓋をされたように、冷たい川から出ることはできず、死んでしまうでしょう。洪水になったら、深い川の上まで汚く激しい泥流が音を立てて流れていきます。柵も何も無い昔の川ですが、誰も死ぬことはありませんでした。親から危ない事を教えられまし

たし、遊んでいる時の川と違って、怖くて仕方ありません。人は自然の中で生かされている動物の一員であることを肌で感じるべきです。それは子供時代にいかに自然に接したかで違ってきます。子供にはこれからの世界を維持管理していく責務があるわけですから、大人は健全な人を育成すべく、配慮を常に考える必要があります。そのために子供が遊ぶことができ、大人が憩うことのできる河川敷も必要と考えますし、川の楽しさと怖さを体験させるべきです。

豊平川に河川公園がありますが、ほとんど利用されていません。車を止めることができないからです。時代の流れを見据えながら、たくさんの人に利用してもらえ事業計画をすべきではないでしょうか。行政の感覚ではなく、時代の先端をいく民間センスを採り入れて、立案することも必要では。また河川パトロールなるものを作り、河川敷へのゴミ捨て、工場の浄水設備チェック、危険行為の注意と罰則を行ってはいかがでしょうか。

ヤツメウナギを捕る舟が浮かび、運搬船が行き交うのを見ながら、石狩平野の母なる川の淵でお弁当を広げ、カヌーに乗ったり、本を読んだり、かわいい子供の遊ぶ姿を眺めていたり、1日ゆっくり過ごせる日が来ることを願っています。不愉快な人がいないことを願って。





## 川に生きる



有限会社ビーバーカヌー 代表取締役  
南富良野町社会教育委員  
小林 茂雄さん

有限会社ビーバーカヌー 空知郡南富良野町幾寅2210 TEL(0167)52-2660

南富良野町・かなやま湖で、カヌーを定着させた小林さんは、中学時代に日本野鳥の会に入会し、野鳥観察に没頭、79年に来道し、2年後全道で初めて木製カナディアンカヌーを製作、85年に南富良野町に移住しました。現在はカヌー等の直輸入・卸売「ビーバーカヌー」と、カヌーやラフティング、冬は犬ぞりなどのツアーを企画運営する「H.A.T.北海道アドベンチャーーツアーズ」の代表として奔走する日々を送っています。

### 形の悪いジャガイモを、お客様に合う形に調理する

「本州の鳥は全て見尽くしたから、そろそろ北海道に行きたいな」ということから帯広畜産大に入り卒業後もそのまま住み着いたんです。学生時代にカナダからアラスカを流れるユーコン河のカヌー下りを体験して、川の上から自然に触れることの愉しさを知った。カヌーに乗ってる人は皆嬉しそう、そういう愉しさを提供する仕事をしたいと思ったわけです。南富良野町は89年の「はまなす国体」カヌー競技開催地で、ちょうどフラノ・サホロ・トマムのリゾートが

### この川と結婚したんだから、ずっと見守る義務がある

小林さんは空知川の真横に自宅とオフィス・工房を構えています。「本当に皆は川をうまく利用しているのか。例えば今『川の駅』という構想がありますけど、人をむやみやたらに集めて自然が壊されるようだったら、上りやすい所しか上れないようにするか、カヌーに乗る側と作る側が話し合えばいい形ができるのでは。悪いところを見直さないと、うちの川は死んでいる」と言っているだけでは解決しない。

僕はこの川と結婚してしまったようなもので、最後まで面倒みなきゃ、という思いがあります。地域の川は、その地域の人が守っていかないと。良いところばかりでなく、残された自然や身近な自然を再度見直して皆で使って、守っていく。

この地域の森も弱ってきています。皆が消費してきたツケ、育つスピードより、使うスピードが上回ったわけで、嘆くだけでなく、これからは木や水を増やす事を流域全体で考えなければならぬと思います。例えば滝川市などの下流の人が上流の森に木を植えるこ

## 上流に森を増やし、若者が夢を持てる場を創る。それがぼくらの表現したいもの。

始まって、「冬にスキーをしに、これだけ人が来るんだから、夏もかなやま湖に人を呼べるのではないか」と、帯広から移り住んだわけです。カヌーの街にカヌー青年というの はわかりやすいだろうし。かなやま湖が人造湖だったという点も味方したと思います。

自然の原始度からいうと、B級、C級なんだけど、だからこそ、僕等を受け入れてくれる余地があったし、誰もまだやってなかった。今やすっかり南富良野はカヌーの街になっちゃって、国道のサインやマンホールまでカヌーマークが描かれている。カヌー好きは踏めないんですけど。

そういう意味では、今「いい自然」というところばかりを観光化するけど、うまくやらないと手垢がつく。僕等は例えていうなら、「おいしいけどデカすぎるジャガイモ」をお客様に合うように調理する料理人で、今までの北海道は「いい自然」にだけ頼っていて、形の悪いジャガイモをどうするかという部分をあまり考えてなかった。僕等のようなガイド的な要素をもっと上手に活用すれば、「いい自然」だけじゃなく、身近な自然も生かされていくと思います」。



とに投資する、これを事業化できないかと思案中です。川は昔交通路で、それから鉄道、道路がとつて変わった。これからは「交流路」として街と街、世代と世代をつなぐ役割を担っていくことでしょうか。そういう点でカヌーはスポーツなんだけど、自然観察や街の歴史を知ることができ、世代間交流の架け橋にもなる。50歳以上の人はカヌーを漕ぐのがとてもうまいんですよ。ボートが青春だったんでしようね。そういう世代と孫、それから親子や夫婦などがケンカしながらも一緒に漕ぐ。現代社会で失われつつあるものが、カヌーを通して共有できると思います」。

大いなる夢を持って南富良野に移った青年そのままの、溢れ出るチャレンジ・スピリット。次なる夢に向かって小林さんの挑戦は続きます。





昨年のテーマは市内の13才の女の子の作品「未来にむかって」



## Towns **the** Present

## いまの流域の現在



### 秩父別町

#### ローズガーデンちっぷべつ

雨竜郡秩父別町字南山  
(高規格道路深川留萌間パーキングエリア建設予定地隣接)  
 問い合わせ 秩父別町産業課商工観光係  
 TEL(0164)3312111

大切に育てられた花々が心を和ます交流拠点

#### 田園を艶やかに彩るバラの花園「ローズガーデンちっぷべつ」

リーベスツアーバア、パーバラブッシュ、ヘンリーフオンダ...。名前や由来さえも美しいバラが鮮やかに咲き誇るのには、北空知の田園・秩父別町。道内有数のバラ園「ローズガーデンちっぷべつ」は花と緑の野外レクリエーション基地として、高規格道路深川留萌間のパーキングエリア建設予定地に隣接する場所に約1年前開園しました。約5・4haのバラ園には世界中から集められた186種1,650本のバラが植えられている他、町の花・ツツジやハマナス、ルピナス、リンゴ、グミなども観られます。開花時期の違う品種を植え、6月から10月頃までいつ行っても見ごろのバラが華やかに迎えてくれ、流路と階段には背の高いバラ、美しさを競う円形花壇、衝立等々、バラの美しさを様々な

隣にはアスレチック等の遊具を備えた「こども冒険の森公園」、既に人気の温泉「ちっぷべつゆら&ゆ」とともに、将来は深川留萌自動車道・秩父別パーキングエリアからの入園が可能となり、北空知全域の情報発信の場としての定着を目指します。



### 芦別市

#### キャンドルアート

平成12年8月5日(土)  
 芦別市カナディアワールド公園  
 問い合わせ キャンドルアート実行委員会  
 TEL(01242)212111

## 子供達の未来が輝く夏の祭典「キャンドルアート」

### 3人の有志と子供達の汗と涙のまちづくり奮闘記

「星の降る里」芦別市の山肌に描き出される子供達の夢や希望。旧産炭地からの脱却と、新たな産業の創出をかけたテーマパーク「カナディアワールド」の誕生と経営不振。「キャンドルアート」は平成6年から行われた「カナディアワールド」における夏のイベントでした。この開催に役買ったのが、市民有志のボランティア団体でしたが、平成8年2月、経費節減のためにイベント自体の中止が決定されます。

しかし、まちの灯火を消してはいけないと、有志の中の3人が5ヶ月後の継続開催に向けて始動します。まずまちづくりグループ「熱血あしべつ倶楽部」を新たに結成、この趣旨に賛同する輪が街全体に広がり、実行委員会方式で

イベント作業が本格的に進められました。第2回目の時、下絵作りや当日の点火ボランティアを募ったところ、約100名の市内の子供達が参加してくれたことから、子供達を主役に生まれ変わりました。子供達にとっては大変な作業でしたが、キャンドルアートの点火を目にした時、歓声が湧き、泣き出す子供もいたほどで、その姿にスタッフも大変な満足感を覚えました。

その後は、住民参加型のイベントとしてすっかり定着、当日は大勢の人達が暗闇に浮かび上がる約6,000本の幻想的な光の芸術に酔いしれます。大きな施設がなくとも、街を愛する住民と未来を見つめる子供達がいることが街の財産という、芦別の心の輝きです。

【概要】  
 キャンドルアートによる演出(キャンドルアート、キャンドルライン、二重ハヤの塔)イルミネーション、レーザーライトショー、ステージイベント、キャンドルウエディング他



北海道開発局

北海道



大きな被害をもたらした昭和56年8月の洪水。

# 千歳川流域治水対策 全体計画検討委員会が始まりました。

北海道開発局と北海道は平成11年12月18日、河川、環境、農業、水産、経済など関係分野の学識者で構成する「第1回千歳川流域治水対策全体計画検討委員会」を開催しました。委員会は概ね2年をめどに関係者との意見交換を行いながら、千歳川の治水対策について協議・検討を行い、地域の合意としての千歳川流域の治水対策を北海道開発局長および北海道知事に提言することになっています。

千歳川は、支笏湖を水源とする石狩川の一次支川であり、流域の中下流部には広大な低平地が広がり、洪水時には石狩川の高い水位の影響を受け、頻りに洪水氾濫が繰り返されてきた地域です。昭和50年、56年の大洪水を契機として、昭和57年3月には石狩川水系工事実施基本計画が全面改定され、千歳川流域の抜本的治水対策として千歳川放水路計画が位置づけられました。しかし、放水路計画については促進運動が行われる一方で、事業が大規模で広範囲にわたるため、漁業影響や自然環境に対するさまざまな意見があり、地域の理解が十分に得られない状況が継続していました。

千歳川流域の治水対策は、緊急かつ重要な課題であることから、千歳川流域の治水対策のあり方について検討するため、北海道は平成9年9月に、知事の私的諮問機関として「千歳川流域治水対策検討委員会」（委員長・山田小樽商科大学長）を設置し、23回の委員会と関係者が一同に会する16回の拡大会議を経て、委員会は平成11年6月に知事に提言を提出、その提言を踏まえて知事は平成11年7月に北海道開発局長および建設大臣に、「道としての意見」を提出しました。

それを踏まえ、平成11年7月30日、開発局長、建設大臣より、知事の意見を尊重して千歳川放水路事業を中止し、それに代わる治水対策を早急に講じることができるよう、必要な検討を早急に行う旨の発言があり、北海道開発局長も「千歳川放水路に代わる新しい千歳川治水対策の全体計画の策定にあたっては、早急に開発局と北海道が共同で『新たな検討の場』を設け、開発局は主に技術的な観点から、北海道は主に合意形成の観点から、役割を分担して検討を進め、千歳川の治水対策を概ね2年間程度をめどに取りまとめたい」と発表しました。

北海道開発局は、これらの検討とともに、千歳川本支流での当面の治水対策を重点的に実施することとしています。



## 千歳川治水対策の主な経緯

明治35年	放水路構想に基づく調査を一部実施
昭和10～40年代	治水および運河構想が検討される
50年 8月	千歳川流域大水害、1,047戸被災
56年 8月	千歳川流域大水害、上旬2,683戸被災、下旬1,275戸被災
57年 3月	石狩川水系工事実施計画改定、放水路計画決定
63年 4月	千歳川放水路事業の予算が認められる
平成4年 6月	知事からルート迂回など5項目の要望
6年 7月	開発局から知事に5項目の要望への回答
9年 9月	知事の私的諮問機関として「千歳川流域治水対策検討委員会」発足
11年 6月	検討委員会が知事に提言書を提出
7月	知事から国に意見提出
7月	国の対応方針発表
12月	国と道が共同で新たな検討の場として「千歳川流域治水対策全体計画検討委員会」を設置

## 千歳川流域治水対策 全体計画検討委員会委員名簿

氏名	所属等	専門分野
小林好宏委員長	札幌大学教授	経済
藤間 聡副委員長	室蘭工業大学教授	河川工学
荒木和秋委員	酪農学園大学教授	農業
小川 巖委員	エコ・ネットワーク代表	環境
黒木幹男委員	北海道大学助教授	河川工学
佐藤馨一委員	北海道大学教授	地域計画
出村克彦委員	北海道大学教授	農業
三田地利之委員	北海道大学教授	地盤工学
山内皓平委員	北海道大学教授	水産



第1回「千歳川流域治水対策全体計画検討委員会」

## 「千歳川流域治水対策検討委員会」で知事に提言された「総合治水対策」の内容について（道としての意見）から抜粋

（1）千歳川流域の河川整備基本方針は、千歳川の安全度を1/100にする必要がある。

（2）千歳川本・支流での対策

ア 現千歳川の堤防内における低水路幅60mを確保するための拡幅・浚渫および千歳川の計画高水位8・5mを確保するための堤防強化を図る。

イ 千歳川流域内の標高概ね6m以下の約18kmに外水用遊水地を設置する。

ウ 内水対策としては、排水機場の排水能力向上に努めると併せて、内水用の調節池を現存の排水機場の隣接地など治水効果の大きい場所に18kmをめどに設置するよう努める。この必要面積を短

期間に同時に設置できないと思われるため、経過をみながら段階的に増加させる。

エ 石狩川との合流点付近の千歳川に、締切水門と排水機場（合計100m<sup>2</sup>/Sの能力を持つ）を設置する。

オ 堤防沿いに樹林帯（河畔林）を設置するように努める。

（3）千歳川と石狩川との合流点の対策  
対策は工事施工の専門家を主体とする「新たな検討の場」を設置して検討する。この際、以下の点に留意する。

ア 検討委員会が合流点における対策として検討した案は下記の5案である。

- 背割堤
  - 千歳川新水路
  - 石狩川河道移設第一案（篠津運河沿い）
  - 石狩川河道移設第二案（江別市、当別町の境界沿い）
  - 石狩川河道移設第三案（現石狩川沿い）
- イ 新たに設置する検討の場においては、必ずしもこれらに限定することなく最良の対策案の検討を要する。



北海道開発局  
石狩川  
開発建設部



オートキャンプ場、コテージ、人工ビーチ等を配置した親水公園



湖底に沈んだ滝里町を後に残す資料等を展示した「ダム資料館」

**新しい時代に動き出した  
憩いの水辺**

ダム建設によって出現した湖は、一般公募によって「滝里湖」と名付けられました。湛水面積は約680haあります。

この「滝里湖」周辺の豊かな自然を生かした憩いの空間が、新たに3カ所誕生します。

一つはダム下流の公園広場で、約5万㎡の緑地を主体とした公園で、ダム下流を眺望する優れた場所となっています。

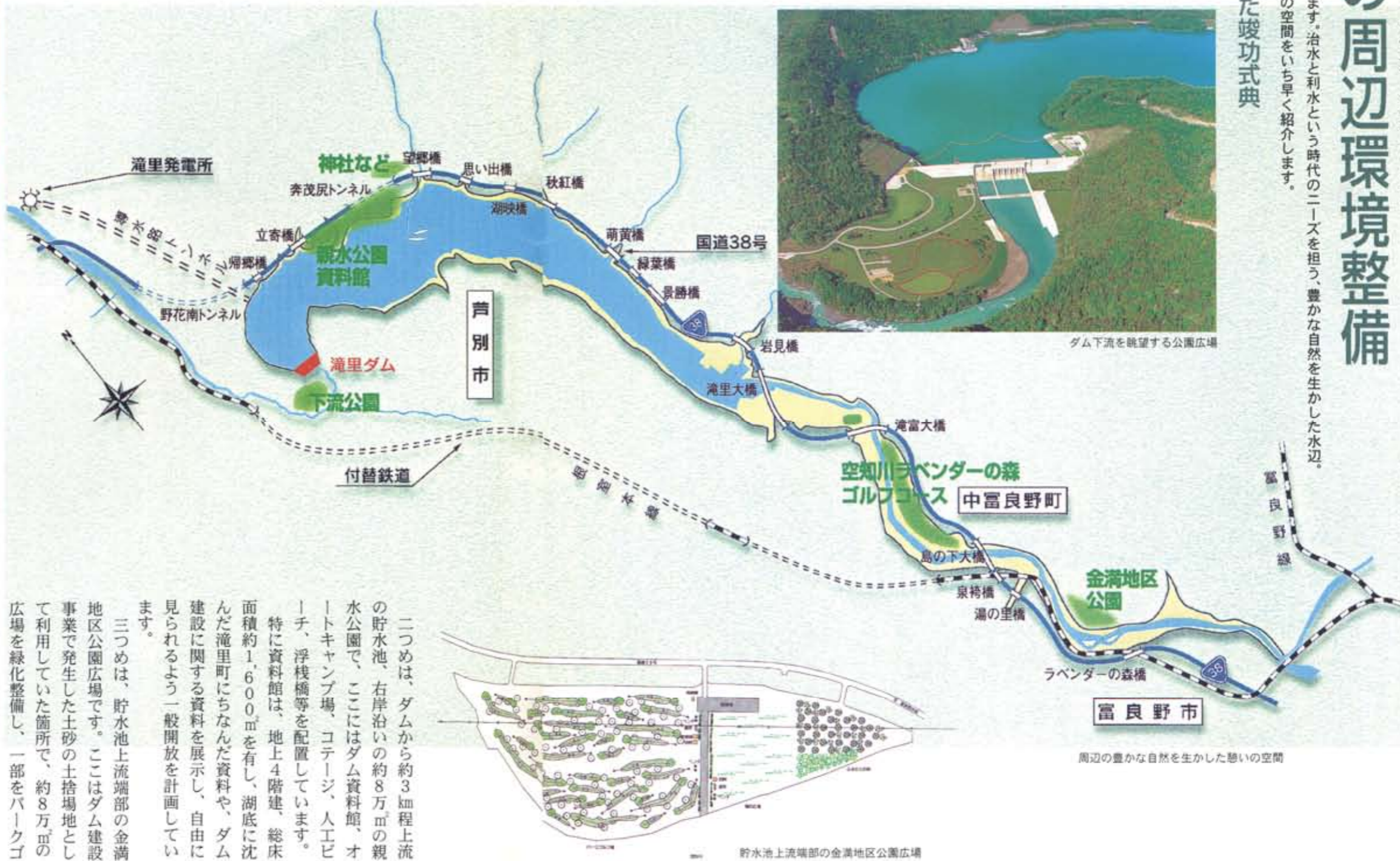
二つめは、ダムから約3km程上流の貯水池、右岸沿いの約8万㎡の親水公園で、ここにはダム資料館、オートキャンプ場、コテージ、人工ビーチ、浮桟橋等を配置しています。

特に資料館は、地上4階建、総床面積約1,600㎡を有し、湖底に沈んだ滝里町にちなんだ資料や、ダム建設に関する資料を展示し、自由に見られるよう一般開放を計画しています。

三つめは、貯水池上流端部の金満地区公園広場です。ここはダム建設事業で発生した土砂の土捨場地として利用していた箇所で、約8万㎡の広場を緑化整備し、一部をパークゴルフ場として利用することになっています。

また、貯水池の中流部には、貯水池の3号区域を利用した「ラベンダーの森ゴルフコース」があり、平成2年度にオープンして以来、年間約4万人の利用客で賑わっています。

滝里ダムは、平成12年4月から供用開始となり、下流の治水安全度の向上と各種用水の供給に大きな役割を果たしますが、これらの空間利用によって、滝里ダムが地域の観光開発の核になることも期待されています。



ダム下流を眺望する公園広場

貯水池上流端部の金満地区公園広場

## 2000年春、新しい水辺が動き出す 滝里ダムの周辺環境整備

いよいよ4月、「滝里湖」の供用が開始されます。治水と利水という時代の二重を担う、豊かな自然を生かした水辺。今、新しい時代に向かって動き出した憩いの空間をいち早く紹介します。

**関係者多数が集って行われた竣工式典**

空知川の中ほどの芦別市滝里地区に、洪水調節、流水の正常な機能の維持、かんがい用水の補給、水道用水の補給、発電を目的とした「滝里ダム」が建設されています。

滝里ダム建設事業は、昭和54年に実施計画調査に着手して以来、今年度で21年目を迎えているところですが、工事の大半が完成しており、昨年3月から開始した試験湛水において堤体及び貯水池周辺の安全性について確認しているところです。

平成11年11月11日、滝里ダム竣工式がダムサイト右岸で執り行われました。

式典には建設大臣、北海道開発長官、北海道知事、地元選出国會議員を始め、地元関係者、地権者および工事関係者を含む約250名が出席して行われました。

竣工式典は、ダムサイト左岸の管理所前で行われ、熊谷開発局長の式辞の後、事業報告、建設大臣など来賓の方々のご祝辞をいただき、記念植樹が行われ、完成を祝いました。



周辺の豊かな自然を生かした憩いの空間



7月

**石狩川フェスティバル**  
7月7日  
旭川市石狩川新永山橋上流右岸  
野外映画会、カヌー体験他  
旭川北商工会  
(0166)5712410

6月

**石狩川交流フェスタ**  
6月末(または7月初旬)  
石狩川流域  
石狩川流域の住民が川下りにより交流を深める。  
■(財)石狩川振興財団内  
水環境北海道事務局  
(011)20017780



**石狩川クリーンアップ作戦**  
5月1日~8月7日  
北海道開発局・北海道・石狩川流域48市町村  
「母なる川」石狩川の恩恵に感謝し、今年も身近な河川の清掃を実施しましょう。  
■(財)石狩川振興財団  
(011)24212242

5月

2000年

石狩川イベントガイド

新しい1000年を石狩川から始めよう！

8月

**定山溪かっぱ祭り**  
8月1日・2日  
札幌市定山溪温泉  
花火大会、大群舞新かっぱ音頭  
定山溪観光協会  
(011)59812012

7月



**川と遊び、流域住民が交流**  
7月8日・9日  
第5回石狩川下流鮭川下り  
空知管内の石狩川および石狩川水系70kmにもおよぶ距離をゆつくりと自然を楽しみながら行う北海道でも最大級の川下り。川と親しみ、川面で遊ぶ、そんな美しい川に戻るよう願いを込め、石狩川流域の各市町村の住民が川下りを通して交流、これからの石狩川のあるべき姿を考える場。参加は小学5年生以上、イカダやカヌーを用意できる川遊びに興味のある人(詳細は事務局まで)。  
■(財)石狩川振興財団  
(0125)6512341

**ないえごども川まつり**  
7月下旬

○奈井江町奈井江川河川緑地  
ヤマベの放流、ニジマスのつかみどり  
■奈井江町都市建設課  
(0125)6512111

8月

**水と緑のまつり**  
8月上旬  
○愛別町愛別ダム上流  
溪流釣り堀、カヌー体験、ダム見学  
会  
■愛別町企画課  
(01658)615111



**遅くなる子供達に感動**  
第4回リバースクール  
千歳川・かわ塾  
8月4日(7日)(変更有)  
○千歳川中心  
各分野の識者による講義、川下りを通して危険回避能力を向上させ、各種の自然観察調査や植樹を体験することで、環境面の問題意識を深め、川全般に関わるグリーン&リバーマスターを育成することを目的に開催(詳細は事務局まで)。  
■(財)石狩川振興財団内  
水環境北海道事務局  
(011)20017780

8月



**空の街の祭典**  
2000北海道スカイスポーツフェア in 滝川  
8月20日  
○たきかわスカイパーク  
「空のまち 滝川」を演説する恒例のスカイスポーツの祭典、自衛隊によるヘリコプターのデモフライトやグライダー等の展示をはじめ、到着後に行列ができるほど、人気も定着したスカイマーケット(空輸による直産品販売)など、広大な空域資源の活用とスカイスポーツの楽しさを教えてくれる。  
■社)北海道スカイスポーツ協会  
(011)23214347

**河口の壮大な景色を眺める**  
2000北海道スカイスポーツフェア in いしかり  
8月20日

○石狩市石狩川河川敷右岸  
デモフライト、各種スカイスポーツ機材の展示をはじめ、風やベストポイントルケットの作り方や飛ばし原理を教える教室、身障者用の熱気球を用意するなど、たくさんの人がスカイスポーツを体験できる場を提供。  
■社)北海道スカイスポーツ協会  
(011)23214347

9月

**百万風祭り in 美唄**  
9月3日  
○美唄市中村町石狩川河川敷  
アーチ連風、ブリッジ連風他  
■美唄観光物産協会  
(01266)310112

北海道開発局  
旭川  
開発建設部



市街地を流れる牛朱別川。人にやさしい空間を目指す

すべての人に利用される、新たな川の可能性：  
福祉の川づくり

北都旭川市を流れる牛朱別川の  
流から下流にかけては、周辺が市街  
地で、住宅や学校、医療・福祉施設  
が多く見られます。  
現在でも堤防の天端道路が通勤・  
通学などの生活道路、学校のマラソ  
ンコース、周辺の住民の散歩道とし  
て利用されています。  
この堤防に緩やかなスロープや階  
段などを設置することで、一般の人  
達ばかりでなく、医療・福祉施設か  
らの散歩や休憩など憩いの場として  
利用の範囲を拡大することができます。

これらの整備を行うことによつて、  
子供から高齢者、健常者から障害者  
までのすべての人に利用され、愛さ  
れる川となる可能性を持っています。  
旭川開発建設部では平成11年11月  
11日から、この考え方に基づいて  
「福祉の川づくり懇談会」を設け、  
整備計画の検討を行うとともに、現  
地視察会や体験会を行つて、その体  
験をアンケートにまとめ、これを参  
考にすることによつて、より人にや  
さしい川づくりを目指しています。



11月11日に行われた「福祉の川づくり懇談会」の現地視察会

※掲載しているイベントは、開催日・内容等が変更される場合もありますので、ご注意ください。



# 石狩川振興財団の活動報告

The Message from ISHIKARIGAWA SINKOUZAIDAN

それぞれの街の“今”を感じる、もう一つの魅力

## 石狩川流域の産業(くらし)と環境

石狩川サミットのもう一つの魅力。それは流域48市町村首長が集うところにあります。セッションでは、街のトップである市町村首長が各自自治体の現状を報告することで、個々の街のまさに今と、これからのビジョンを知ることができず。

産業と環境をテーマとしたセッションでは、肥沃な大地を生かした農業を財産に、豊かな自然と共存しうるまちづくりを目指すという意見が多く聞かれました。

## 石狩川流域の歴史を語り未来につなぐ

また、洪水の歴史や開拓の苦労が人々の記憶から消えないよう、各市町村が取り組む歴史的事項の啓蒙活動や行事などがそれぞれ報告され、最後に第5回サミット宣言が承認され、時代の変換期に行われた本サミットは終了しました。

### 【第5回石狩川サミット宣言】

石狩川流域48市町村は、先人が努力と忍耐をもって築いた石狩川流域の歴史を尊び、21世紀に向けて「持続可能な発展」を目指し、以下の課題を確認し、自立と連携のもとに、まちづくりに取り組むことを宣言する。

1. 自然と共生する流域を背景に、個性あるまちづくりを推進するための産業振興
2. 石狩川本流および支流の水源涵養を含む系統的、総合的な治水



### 編集後記

世界中が心配した二千年問題も、さほど影響なく、いよいよニューミレニアムに突入しました。本号はこれにふさわしく、石狩川流域で様々な活躍をされている、あるいは日頃石狩川に夢をさせている、2000名ならぬ20名の方々に、2000年代の石狩川への夢を語っていただき、特集としました。何かとお忙しい中、貴重なご意見を語っていただきました方々に、心より御礼申し上げます。また、昨年の11月5日に10周年目第5回を数える石狩川サミットが石狩市で開催されました。20世紀最後の年にふさわしく48市町村首長より、石狩川流域の発展の歴史を振り返り、未来を熱く語り語っていただきました。来るべき21世紀に少しづつでも実現していきたいものです。そのためには、流域内の各界のネットワーク、パートナーシップが大切かと思えます。石狩川流域の発展に向けて、一層のご支援、ご協力を切望し、編集後記といたします。



# 自然と人間の共生

テーマ「21世紀の石狩川流域を語る」その規模と歴史。類を見ない「石狩川サミット」

## 第5回石狩川サミット

石狩川サミットは、石狩川流域48市町村首長が集まって「自然と人間の共生―川からのまちづくり」をテーマに、平成3年、旭川市で開催されました。以後、第2回は「緑とあそび」(H5年、砂川市)、第3回「未来を託すひとづくり」(H7年、江別市)、第4回は「石狩川流域のなかのまちづくり」(H9年、滝川市)など、8年にわたってテーマを重ねてきました。その間、「8月7日石狩川の日」や石狩川流域人口に合わせた「1人1本280万本植樹運動」という具体的な提案が実行に移されるなど、まさに流域としてのビジョンやポリシーを世に問い掛けてきました。

第5回石狩川サミットは、11月5日(金)、石狩市サポートセンタープラザにて、20世紀最後にふさわしく、堀北海道知事やロシア・中国総領事も出席し、国際色豊かに行われました。



されています。そういう意味からも、先進的で長期的な展望に立つた流域のあり方を問うこのサミットに寄せられる期待は、今後さらに深まっていくと考えられます。

### 審議を重ねたアクション・プログラムを発表

過去4回のサミットを通じて、自然との共生を目指す流域づくり、流域のなかのまちづくりのための討議を重ねた行動計画「アクション・プログラム」の策定に取り組んできました。平成10年度のシェールバ会議や幹事会での審議を経て、今回、アクション・プログラムの発表に至りました。

### 【アクション・プログラム(案)】

- 一、石狩川流域の森づくりについて  
石狩川流域280万本植樹(第2回石狩川サミット宣言)を改称し、石狩川流域300万本植樹運動として、推進する。
- 一、石狩川流域マップ(仮称)について  
環境、産業、歴史・文化の3分野にわたり、マップづくりを進める。

